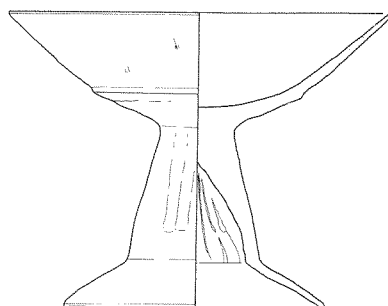


曾 池 遺 跡

発掘調査概要報告書



1996

名古屋市教育委員会

例 言

1. 本書は、名古屋市南区呼続四丁目13番、富部神社境内内で行った、曾池遺跡発掘調査の概要報告書である。
2. 調査は、富部神社の防火水槽建設に先立ち、1995年10月11日から同年10月31日にかけて実施した。調査面積は約100㎡、調査担当者は、名古屋市見晴台考古資料館学芸員水野裕之、服部哲也、村木誠であり、現地での調査は水野と村木があたった。また、防火水槽から富部神社の放水銃までの給水管部分については、工事立会とし、名古屋市教育委員会文化財課竹内宇哲が担当した。
3. 本書で示した標高はT. P. (東京湾平均海面基準)、座標は建設省告示の平面直角座標第VII系である。
4. 本書は、見晴台考古資料館職員の協力を得て、竹内、村木が執筆し、村木が編集した。
執筆は、給水管地点の調査の経緯と遺構について竹内が行い、他は村木が行った。
執筆に際し、加納俊介、森泰通の両氏から貴重なご教示をいただいた。
5. 調査の記録、出土遺物等は、見晴台考古資料館で保管している。

目 次

- | | | |
|---|--------------|----|
| 1 | 位置と環境 | 1 |
| 2 | 調査の経過 | 3 |
| 3 | 防火水槽地点の遺構と遺物 | 5 |
| 4 | 給水管地点の遺構と遺物 | 8 |
| 5 | まとめ | 21 |

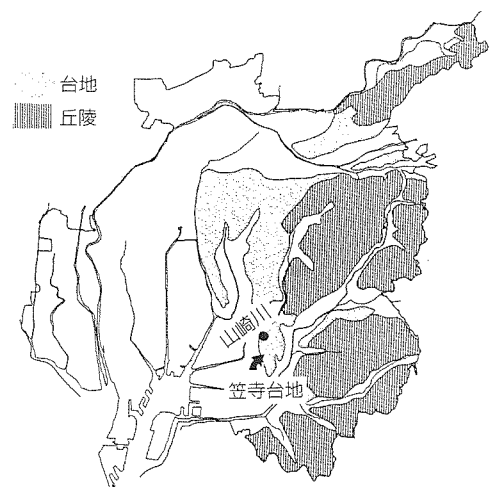


図1 曾池遺跡の位置 (黒い丸印)

1 位置と環境

位置

曾池遺跡は、笠寺台地西側縁辺部に立地する。笠寺台地は、名古屋市市の市街地を乗せている熱田台地の南端部が、山崎川によって開析された結果、島状に残った台地部である。熱田台地と同様に、洪積層である熱田層から構成されている。(図1)

遺跡は現在、西半が呼続公園、東半が富部神社の境内となっている。遺跡の北西には曾池が広がっているが、この池は、笠寺台地を侵食してできた谷地形を中世末もしくは近世にせきとめてつくった灌漑池である。

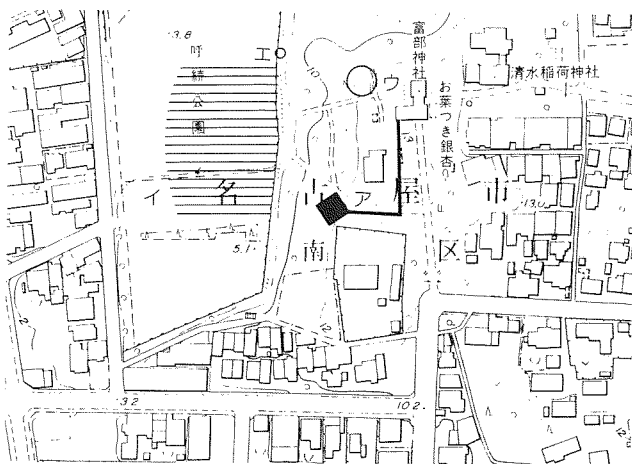
今回の調査地点は、富部神社の境内から呼続公園に向かって降ってゆく緩やかな斜面に位置している。現在は、神林となっており、大きな攪乱は受けていない。(図2)

● 曾池遺跡と周辺の遺跡 (図2、3)

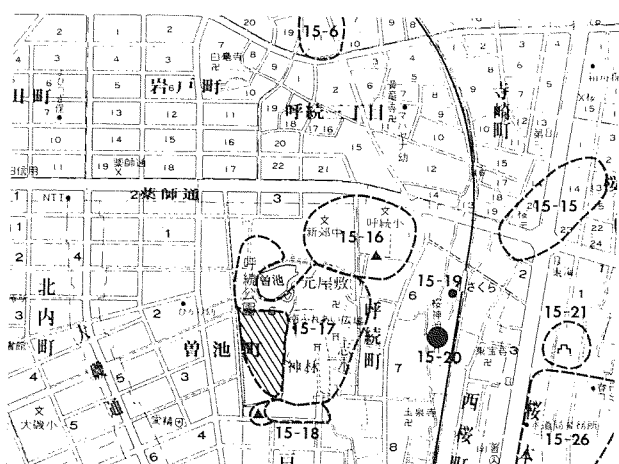
笠寺台地には、弥生時代以降の遺跡が多く、全てについて触れる余裕はない。まず、これまで曾池遺跡について知られていることをまとめ、それと関わりをもつであろう遺跡について紹介する。

曾池遺跡は、1952年に呼続公園の運動場造成のために、曾池南側の台地部を削平している際に発見された。その後1955年に加賀宣勝氏、1974年には三渡俊一郎氏らが調査を行っている。それぞれの調査地点が曖昧で特定できていないが、その成果を概観しておこう。

加賀氏の調査地点は、今回の調査地点の北西、現在の呼続公園のグラウンドにあたると思われる。加賀氏は、5地点で6基の竪穴住居を発見したと報告している。各地点から、縄文時代晩期の深鉢、弥生時代後期土器、土師器、須恵器等が出土しており、住居址も縄文晩期、弥生時代後期、古墳時代のものがあるとされている。また、加賀氏が「五号」と呼ぶ地点には、住居址が2基あったようで、その内の1基には、2m四方の木組みの構築物があり、「この奥に八十種のすき間があり」、その中から下駄、篩などの木製品が出土している。この構築物周辺には、須恵器と山茶碗が混在しているが、加賀氏は構築物の年代を奈良時



ア、今回の調査地点 イ、加賀氏調査地点
ウ、三渡氏調査地点 エ、中世の井戸発見地点



15-17 曾池遺跡 (斜線部は滅失)
15-16 呼続遺跡 15-18 戸部町遺跡
15-19 町屋古墳 15-20 桜神明社古墳

図2 曾池遺跡調査地点

図3 曾池遺跡と周辺の遺跡

代と推定している。その他の地点では、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器等が出土している。(注1)

三渡氏の調査地点は、今回の調査地点の北約50mの所と推定されるが、古墳時代後期の竪穴住居跡、奈良時代と思われる掘立柱建物が検出されている。竪穴住居からは、6世紀代と思われる須恵器が床面で出土している。そのほか、遺構には伴っていないが、7世紀後半から8世紀にかけての須恵器杯、横瓶などが豊富に出土している。(注2)

そのほか、調査によるものではないが、呼続公園と富部神社境内の境の石垣沿いで中世の井戸が検出されている。この井戸は、直径50cm程の円形で、周囲が25cm程の厚さの粘土で覆われていた。「桜の皮様」の井戸枠が遺存していたようである。井戸枠を包んでいた粘土内から、山茶碗と南伊勢系土師器鍋が出土している。これらの遺物は、実測図から判断して、13～14世紀頃と思われ、それが井戸の時期を示すと見られる。(注3)

こうした調査事例から見て、曾池遺跡は縄文晩期、弥生時代後期、古墳時代後期、奈良時代、中世の各時代にわたる遺跡であると判断できる。

曾池遺跡のすぐ北側に所在する呼続遺跡では、名古屋市教育委員会による調査で、須恵器、土師器を出土する古墳時代の竪穴住居が8基、鎌倉・室町時代の溝等が検出されている。古墳時代の住居は、須恵器出現直前から6世紀代のものである。古墳時代を溯る時期のものとしては、呼続小学校の建設工事の際に、弥生時代後期土器が出土したという。(注4)

一方、南側には奈良時代の住居跡が発見されている戸部町遺跡が隣接している。戸部町遺跡も加賀宣勝氏によって調査されているが、奈良時代前期から後期にかけての竪穴住居11基、屋外炉などが発見された。

(注5) 何れの遺跡についても、いまだ不明瞭な点が多いが、曾池遺跡の遺構、遺物の中に同時代のものが存在しており、弥生時代後期及び古墳時代については呼続遺跡から曾池遺跡にかけてが、奈良時代を中心とする古代においては曾池遺跡から戸部町遺跡が同一の集落を形成していたと推定してよいだろう。また、中世についても、曾池遺跡から呼続遺跡の一带に遺構が広がっていると推定できよう。

更に、曾池遺跡の東200mあまりの現在の名鉄名古屋本線沿いには、桜神明社古墳、町屋古墳がある。現存するのはこの2基のみであるが、加賀氏によると、桜神明社古墳と町屋古墳の間に2基の古墳があったという。(注6) これらの古墳は、今では地上部分は失われている。

桜神明社古墳は直径36m、墳丘の高さ4.5mを計る円墳で、西側と北側には幅3mの周濠が遺存している。内部主体については不明であるが、墳丘裾部で須恵器が採集されており、その図をみる限り5世紀末から6世紀初頭のものである。(注7) 一方、町屋古墳は、墳丘が削平されているが、円墳である。西に開口する横穴式石室を内部主体とする。石室内から、金環、管玉、須恵器長頸壺、甗などが出土している。須恵器から見て7世紀前半ころと思われる。(注8) 失われた古墳については情報が無いが、おそらく後期古墳と思われる。曾池遺跡及び呼続遺跡はこれらの古墳とほぼ同時代の集落遺跡であり、単に同時代であるにとどまらず、有機的な関連をもった遺跡であると考えべきであろう。

(注1) 加賀宣勝「曾池貝塚の概略と木器」『郷土文化』第15巻第4号 1960

引用した文章も、この文献による。

(注2) 三渡俊一郎「富部神社境内内遺跡第一次調査報告」『古代人』31 1975

(注3) 三渡俊一郎「名古屋市呼続公園の中世井戸遺構と遺物」『古代人』29 1974

引用した文章もこの文献による。

(注4) 名古屋市教育委員会『雷貝塚・呼続遺跡・NN-328号古窯跡発掘調査概要報告書』 1981

名古屋市教育委員会『第II次呼続遺跡発掘調査概要報告書』 1985

木村有作「名古屋台地上の集落遺跡（補追）」『断夫山古墳とその時代』 1989

(注5) 加賀宣勝「遺物・遺跡関係」『南区郷土文化写真集』 1968

(注6) 加賀宣勝「野屋古墳」『郷土文化』第15巻第1号 1960

(注7) 三渡俊一郎『南区の原始・古代遺跡』 1969

なお、本文献は曾池遺跡や周辺遺跡についてもコンパクトにまとめられており、他の遺跡についても参考にした。

(注8) 前掲注6文献

2 調査の経過

先述したように、今回の調査は、富部神社の防火水槽設置に伴う事前調査として行った。1995年10月12日に現地での調査を開始し、同年10月30日に現地調査を終了した。調査区はほぼ、10m×10mの正方形のため、グリッドは設定せず、大凡4分割して遺構、遺物の記録を作成した。

その後、防火水槽建設業者が、事前調査を行った範囲を大きく逸脱して掘削を行ったため、工事を中断させると共に、11月29日に不十分なが追加の調査を行った。この追加の調査では、新たに掘削された部分の内、遺構が残っている可能性がある部分について平面の調査を行い、新たに露出させられた断面については精査し記録を作成した。この追加調査では、2個のピット断面を見つけたが、掘削することはできなかった。また、調査時に用いた測量用の杭を除去した後のことであったため、このピットの位置の記録も正確とは言い難く、大変遺憾であった。

その後、見晴台考古資料館において、出土遺物や記録の整理を行った。

給水管地点の調査についての経緯は4で記す。



写真1 追加調査風景



写真2 追加調査断面（ピット検出）

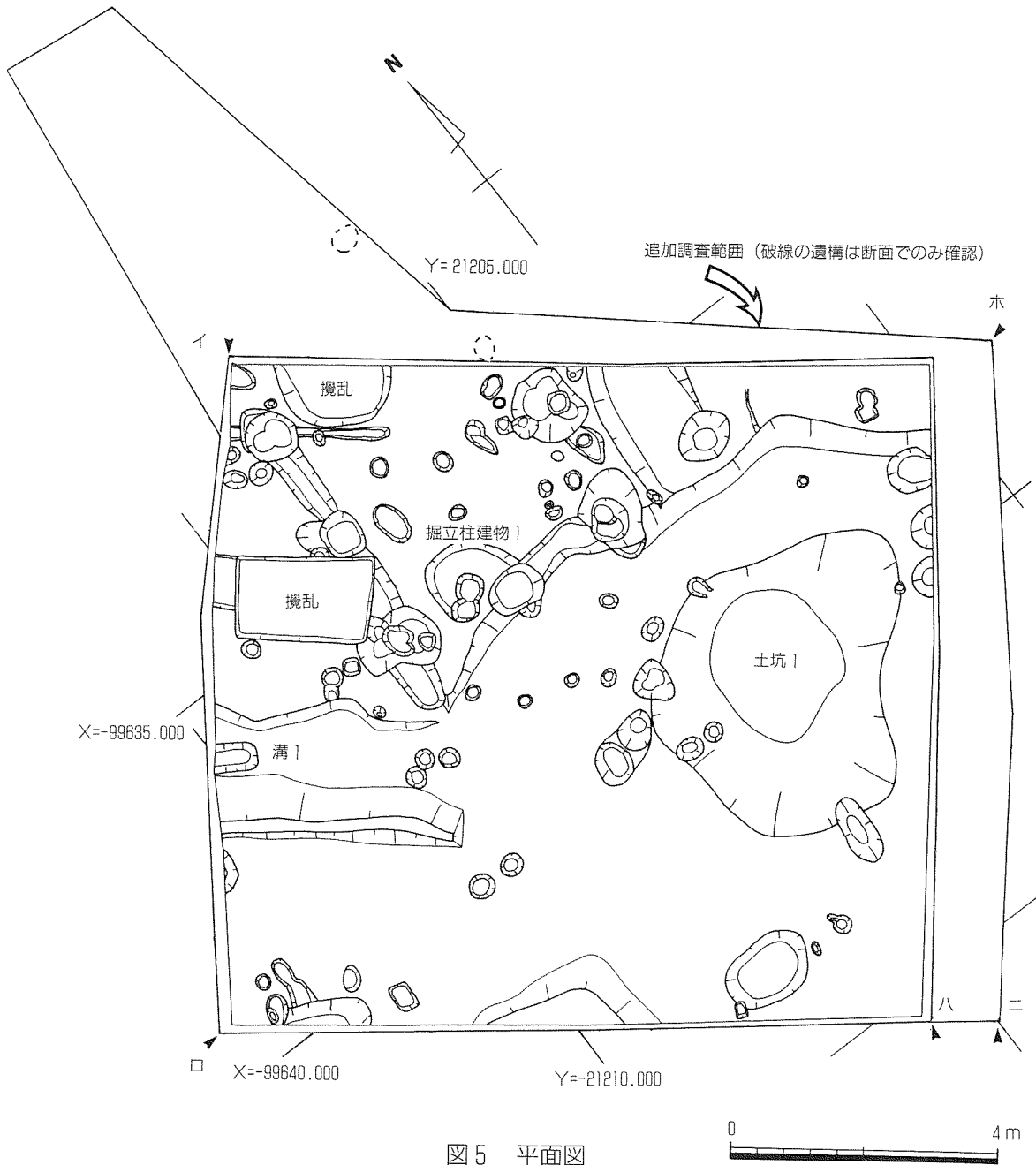


図5 平面図

3 防火水槽地点の遺構と遺物

3-1 基本層序 (図4)

今回の調査地点は、平坦部から西に降ってゆく斜面のちょうど屈曲部あたりに相当し、現地表はほぼフラットであるが、掘削の結果、地山は西に向かって降っているのが確認できた。

層序は、色調の微妙な違いはあるものの、大きく4層に分けることができると考える。図4に示したように区分した。

図の4層の下は、熱田層とよばれる黄橙色粘質土(地山)である。ほとんどの遺構は、この地山面で検出したが、溝1は2a層の上面で検出できた。

2層および3層は、近世までの遺物の包含層である。出土層位が明らかな遺物から、3層の堆積が近世

以降であることが確かめられる。4層については確実な遺物の出土がなく不明である。

3-2 遺構と遺物 (図5)

遺構は、2a層上面で検出した溝1のほか、地山面で検出できた掘立柱建物1、土坑1、多数のピットがある。平面図で攪乱と表記した土坑からは何れも現代の遺物が出土している。遺物は、総量でコンテナ2箱と少量で、個々の遺物も細片が多い。主だった遺構とその出土遺物について記す。

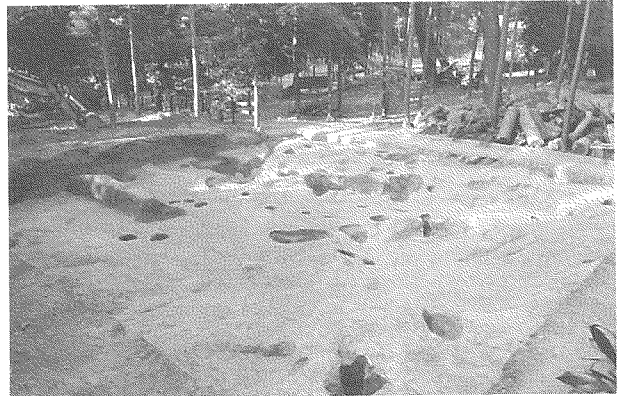


写真3 全景

溝1 溝1は、調査区の中央を東西に横切るような形で検出した。調査区の北西壁際では、断面が緩やかなV字形で明瞭な溝状を呈するが、東にゆくにつれ

浅くなり、平面形も不明瞭となる。出土遺物は、土師

質土器小片、山茶碗、中世陶器小片等であるが、掘り込まれた層位からみて、近世以降の遺構である。
掘立柱建物1 (図6、写真4) 調査区の北部で検出した。方向は、ほぼ南北方向を示している。検出できたのは、2間×2間である。追加調査の際に、断面で確認されたピットは、位置がややずれるのと、直径がやや小さい点で断定はできないが、この建物の柱穴の可能性もある。また、西側の柱穴列には、それをつなぐような溝が検出され、建物に関わる遺構と思われる。個々の柱穴は、直径が80cm~90cm、深さが地山面から60cm

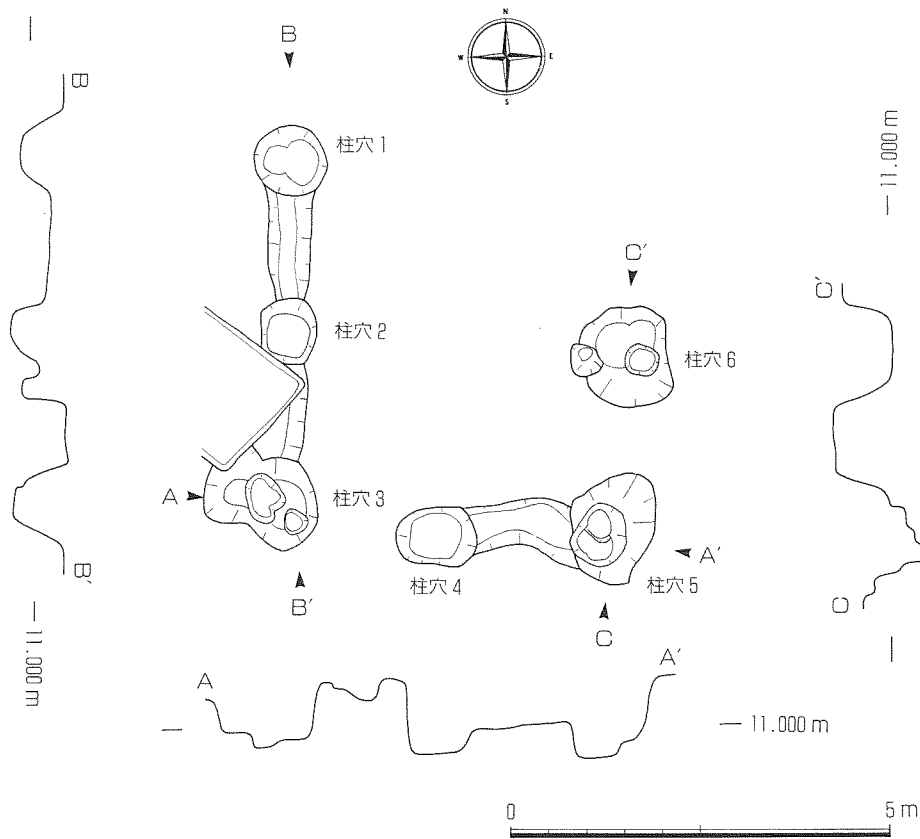


図6 掘立柱建物1 平面図

~100cmと規模の大きなものである。(写真5)柱穴3では、柱の痕跡が残っており(写真6)、直径20cm以上の柱が復元できる。これらの柱穴からの出土遺物は、小片が多いが、何れも14~15世紀以前のものであり、掘立柱建物の年代も、この時期と見てよいだろう。柱穴6から出土したのは、古瀬



写真4 掘立柱建物1

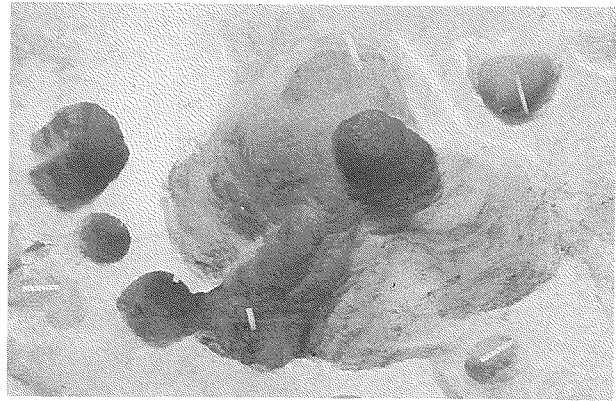


写真5 柱穴6完掘

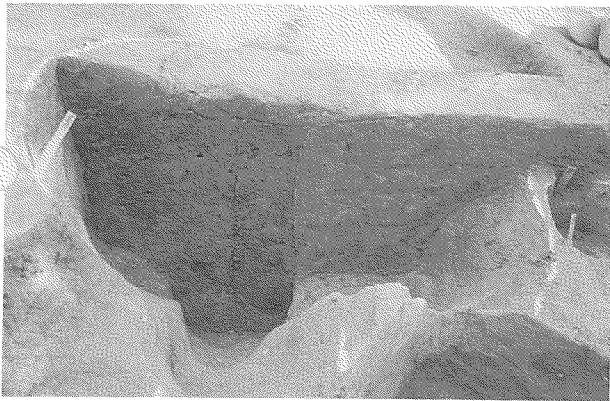


写真6 柱穴3

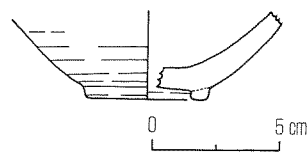
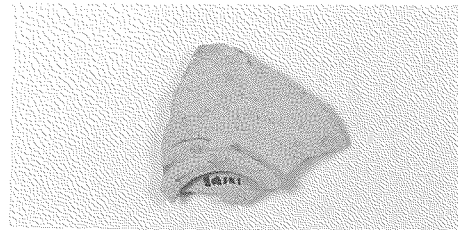


図7

柱穴6
出土遺物

写真7



戸灰釉陶器碗の底部（図7、写真7）、山茶碗片である。

灰釉陶器碗は、底径5.0cmを計る。高台は、断面隅丸方形の貼り付け高台である。

体部外面の下位は回転ヘラケズリが施される。ちょうど破片の上端付近より上位が施釉されている。内面は破片の全体が施釉されている。また、柱穴3の出土遺物には、須恵器、山茶碗片、鉄釉陶器片などがある。（写真8）

土坑1

調査区中央、東壁よりで検出した。長径4.4m、短径3.4mの楕円形を呈する。底は平坦で、緩やかに立ち上がる壁面を持つ。埋土は、地上の熱田層が灰色に汚れたような感じで、他の遺構とは異質である。出土遺物は無く、時期は不明である。

ピット ピットは調査区全体にわたって、大小取り混ぜて70個ほど検出した。遺物の出土したピットは多くない。出土した遺物は、中世のものと近世のものが主体であるが、量的にはわずかで、遺構の年代を決定するには至らなかった。

その他の遺物 写真9は、縄文時代のものと思われる変成岩製の打製石斧である。長さ23.5cm、基部幅5.6cm、最大幅10.6cm、刃部幅8.5cmを計り、短冊形を呈している。刃部先端は使用により、磨耗している。この資料は、今回の調査区の東の富部神社境内内で表採した。表採品のため、曾池遺跡に関わるものか否かも定かではないが、加賀氏の調査の際には、縄文土器が出土しており、加賀氏調査地点より東にも縄文時代の痕跡が広がっているのかもしれない。



写真8 柱穴3出土遺物

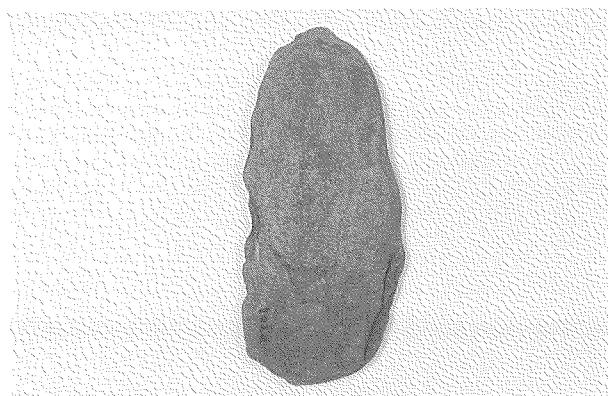


写真9 表採品(打製石斧)

4 給水管地点の遺構と遺物

4-1 調査の経緯

水槽から放水銃への給水管については、約80mほどが地中埋管であるが、平均的な掘削幅は60cmであるため、工事立会の対応となった。(図8) その結果、土坑1基・住居1基を確認した。

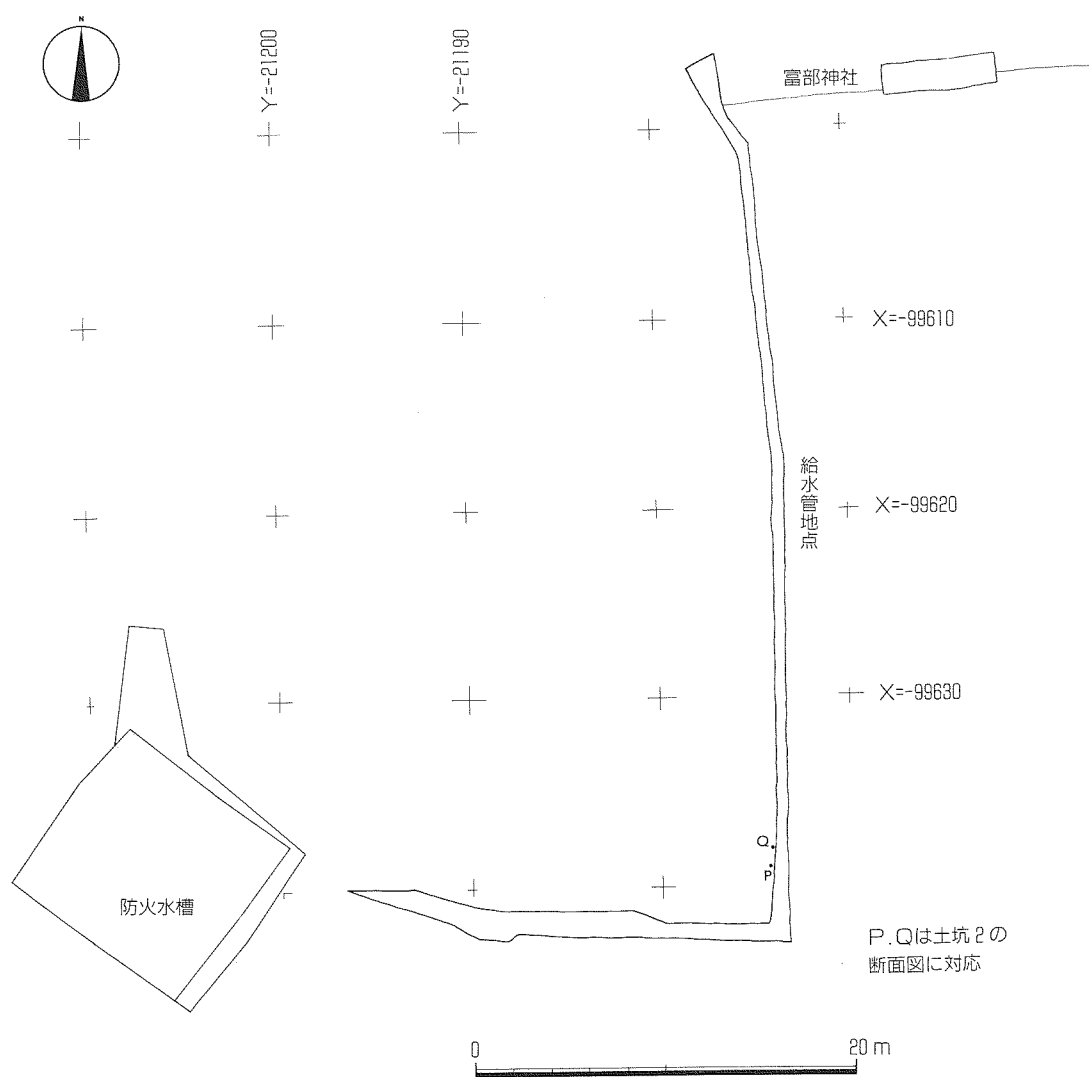


図8 給水管地点位置

4-2 遺構と遺物

土坑2 (図10)

地表から30cmほどで地山(黄褐色粘質土)があり、その上面からの深さは、70cmほどである。ほとんどは、現行の防火水槽を建設した際に破壊されており、上部で10cm、下部でも50cm程度しか残っておらず、規模ははっきりしない。なお、プランははっきり検出できなかった。底部で台付甕形土器が出土した。(図9、写真10)時期は古墳時代と思われる。

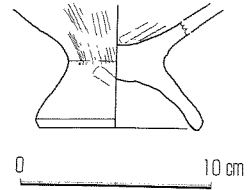


図9 土坑2出土遺物

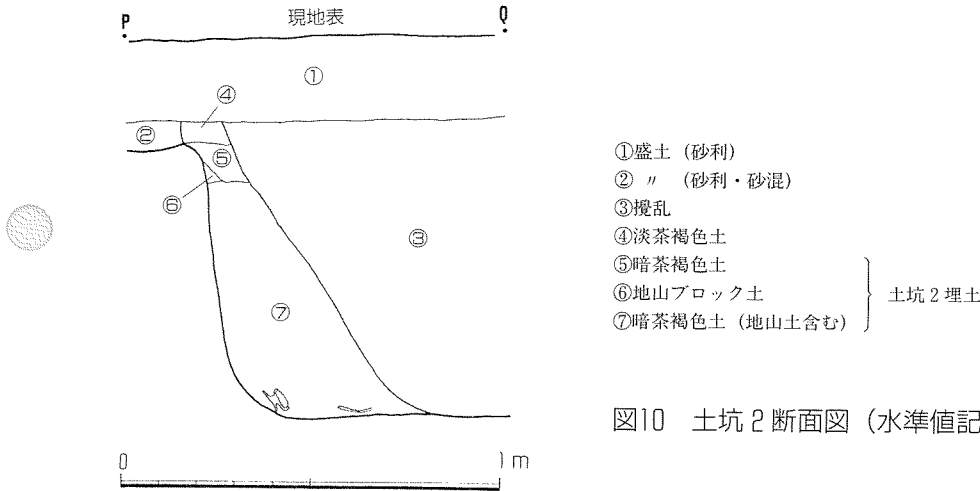


図10 土坑2断面図(水準値記録できず)

住居1 (図13)

富部神社の回廊付近で検出した。バックホウでの掘削中に土器が集中していたため、作業を中止させたものの、掘削幅が40~60cmしかなく、土坑の性質に苦慮したが、炉跡が確認されたため、住居と判断した。工事設計によれば、床面以下の深さに配管する予定であったが、協議により、給水に支障がない範囲で浅く配管することとし、結果、床面を保存することができた。

住居壁の立ち上がりは、北側が明瞭であった反面、南側ではラインがやや不明瞭であったが、およそ一辺4mと推定される。また壁際では、貼床が認められたが、床面と貼床との区別がはっきりせず、炉が検出された面を床面とすると、深さは最大で40cmほどになる。土器の多くは、床面直上で出土しており、埋土もほぼ暗茶褐色粘質土の一層であった。

なお南端で直径35cm、床面からの深さ10cmピットが確認され、甕形土器が出土した。また、炉は、直径50cmほどで、良く焼けており、6cmほどの深さまで被熱していた。

住居1出土遺物(図15、16、写真11~21)

住居1からは、縄文時代晩期の深鉢口縁部(1)、大量の土師器(2~35)が出土した。1から6までのものは、埋土中及び住居内の特定できない位置から出土したものである。7~35については、住居床面上の一括資料と判断できる。(図14)

土器は、炉を中心として、甕、壺、高杯などの器種がほぼ個体毎に出土している。完形に復元できるものも多く、使用時の原位置を保っているのではないと思われる。調査範囲内では、炉の周りに高杯が比較的集中しているのが注意される。甕も、口縁部や脚部の破片といったものも含めると、炉の周辺に多い

とすることができる。

なお、個々の資料については、観察表を作成し、その特徴を示した。(表1)調整について、イタナデとしたものは、ハケメと同一の原体による痕跡とも思われるが、器面に残る条線がハケメに較べると浅く、弱いので区別した。また、ヘラナデは、幅の広い角ばった平滑面をその痕跡と判断した。

埋土中の資料も含めて土師器を以下の様に分類した。

器種としては、壺、甕、高杯、器台、鉢、小型壺がある。壺と甕については、器形のみからは判別し難い物が多いため、被熱痕の有無によって、有るものを甕、無いものを壺とした。また、被熱痕は、はっきりそれと認識できる痕跡のみを認定した。また、被熱痕の認められない破片についても、被熱痕のないものとして壺に分類している。各器種内で、形態によって細分類したものは以下の通りである。

壺 口縁形態は、単純にくの字に外反する口縁をもつもののみ(7, 8)であるが、底部については、口縁とは別に、以下のように分類した。

壺底部A いわゆるドーナツ底を残すもの。(9)

壺底部B はっきりした平底のもの(10, 11)

甕 A S字状口縁台付甕(12, 13)

B くの字に外反する口縁を持つもの。(14~19)

甕Bについては、全形のわかる例は平底であるが、台の出土数から見て、台を持つものも含まれていると思われる。口縁形態からは、台の有無はわからない。

C 小型の台付甕。(20)

甕台部は分類できなかった。(21~27)

小型壺 A 有段口縁になるもの。(29)

B 直口縁のもの。(30)

鉢 小片のため、正確な器形はわからないが鉢と判断したものが1点ある。(31)

高杯 A 口径20cm、器高15cm程度の、いわゆる屈折脚高杯の系譜を引く物。(32~34)

B Aに較べて法量大きく、杯部に断面三角形の突帯を貼り付けるもの。(3)

高杯の脚(4~6, 35)は、法量から見て高杯Aのものと思われる。

器台 1点のみ出土している。(2)

埋土中の資料

2は器台である。くびれ部直下に、ハケメ風の直線文が巡っている。

3は高杯Bである。小片であるが、断面三角形の高い突帯を貼り付けている。

4~6は高杯Aの脚部であろう。いずれも、外面はヘラ状工具による幅7mm~1cm程度の縦方向のナデ調整と共通しているが、脚内面の調整の仕方に相違が見られる。

床面一括資料

壺は、壺と判断したもの2個体(7, 8)とも、単純に外反する口縁を持つ。7は球形の胴部を持ち、

形態的には甕と判別できない。ただ、器壁がきわめて厚く、甕Bの14が内面をイタナデによって器壁を搔とるようにして薄くしているの(写真19)とは対照的である。内面に粘土の継ぎ目が残っている。また、外面は、上半はナデ、下半をヘラケズリしている。底部は、いわゆるドーナツ底をヘラケズリによって丸底化している。(写真17) 8も、被熱痕を持たないが、器壁は薄く、甕のそれに近い。

甕Aの口縁形態は、赤塚氏の分類(注1)に従えばいずれもC類に比定できるだろう。12は、口縁上段がななめに伸び、端部が内側にわずかに肥厚し、その下位が沈線状を呈している。13は、口縁上段が一度上方に立ち上がり、途中で強く外反し幅広い面をなす。口縁部先端はわずかに内側に肥厚し、その直下が沈線状になっている。胴部のハケメは粗い。この個体は、口縁部の形態ではC類でも古段階に近いと思われる。

甕Bとしたものは、くの字に外反する口縁といっても形態にヴァリエーションがあるし、台のある物、ない物をともに含んでいると思われる点で、有効な分類とは思われず、便宜的なものである。14は唯一全形がわかるが、突出した平底、球形の胴部をもつ。内外面とも被熱の痕跡が顕著である。(写真18~21)

甕Cとした20は、口径8cm、器高がせいぜい15cmと明らかに小型のものである。体部内面には粘土の継ぎ目を明瞭に残し、粗雑な造りのものである。底部には、脚部が剝離した痕跡が明瞭に残っている。

台部は、形態が判明するものが少なく、有効な分類ができなかった。26のみは、ハケメの特徴などから見て、甕Aの台の可能性はあるが、小片のため確定できなかった。

28は、直口壺の口縁部と思われる。内外面をイタナデする。口縁部と体部の接合部は粘土の継ぎ目を明瞭に残し、肥厚している。

29は、小型壺Aである。口縁部と体部は接合せず、体部の傾きは推定である。口縁部ははっきりと段をなす。30は、小型壺B。体部の高さに比べて口縁の高さが小さい。他遺跡で認められる小型壺Bと比較すると、器壁が薄く、胎土中の砂粒が少ない点で比較的作りがよいものと言えるだろう。

床面出土の高杯は何れもAであるが、杯部の形態、脚部の形態、杯と脚の接合方法などは多様である。中でも、杯部と体部の接合方法は、図11に示すア、イの二通りが観察された。アは、脚頂部をあらかじめ開けておき、その側面に杯部を継ぎ足してゆく方法で、32、34などが該当すると思われる。一方、イは脚頂部は開いたままの状態、その上部に杯部をつくり、最後に上方から粘土を充填するもので、33が該当する。この二通りの方法は、森泰通氏が、神明遺跡の報文中で「接合a」「接合b」と呼んだもの(注2)に対応すると思われるが、森氏も述べるとおり、ヴァリエーションがあつて、イ(接合b)のなかでも、脚頂部の側面に杯部の剝離痕を持つものがあり、必ずしもイ(接合b)が脚部と杯部が別づくりであると確定できないため、本稿ではつくり方の評価を含まず、観察できる痕跡の分類としておきたい。脚柱部外



図11 高杯Aの杯・脚接合部

面は、縦方向にヘラナデするものが多く、まとまりを見せるが、内面の調整方法は多様であり、縦方向にナデを行うもの(32)、シボリの後横方向にヘラケズリするもの(33, 34)、ナデ調整で、ユビオサエの痕跡が残るもの(35)などがある。

さて、この住居1出土遺物は、縄文時代晩期と思われる1を除けば、埋土からの出土遺物も含めてほぼ同時期のものと思われるが(2の器台は微妙なところである)、より正確な議論の為に、住居床面出土資料についてのみ検討の対象としよう。

まず、時期であるが、小型壺Aの存在から松河戸II式(注3)を遡りえない。筆者がかつて示したものに従うならば4期における。(注4)しかし、問題点がある。甕Aの型式を巡る問題である。住居1から出土する甕Aは、口縁の形態は二点とも赤塚分類のC類に比定できるが、4期の資料は一般的に、D類や更に後出する宇田型甕を伴っているのである。また、これに先立つ3期の高蔵遺跡の資料にも典型的なD類が伴っており、4期の資料にC類が伴うというのは前後関係から見て矛盾するように見える。これに対する答の方向は二通りあって、一つは12、13とも小片であることから混入と考える方向、もう一つは、名古屋台地での甕Aの型式変化の検討と、その共伴関係に基づいて甕Aの編年を検討することである。第一の方向について言えば、両者とも他の土器と同様に床面直上からの出土であり、これのみを混入とする根拠はない。また、口縁部片と接合はしなかったが、胴部の比較的大型の破片も出土しており、この点でも混入と考える方向は成り立たない。とすると、やはりこの甕Aが4期に存在した事を認めたいうで、名古屋台地でのS字甕の型式変化とその共伴関係を検討する方向に進まざるを得ない。甕Aの型式変化がスムーズにたどれる尾張低地部では、福田遺跡SB04の資料(注5)の中にやや古い形態のものが認められる他は、今のところこうした矛盾は顕著には生じていないから、やはり甕Aの型式変化の地域的相違を考えねばならないということだろうか。

ところで、甕A(S字状口縁台付甕)が尾張低地部での型式変化の順序とは矛盾する様に共伴していることはすでに美濃の堀田・城之内遺跡の例から指摘されている。(注6)同遺跡の場合、住居の埋土からの出土例であって厳密な同時性の保証がなく、混入と判断すべき事例が含まれていると思われるが、全てが混入で解決できるわけではないだろう。更に、大和の多遺跡でS字状口縁台付甕C類とTK85型式の初期須恵器が共伴していることから、現行の大和と尾張の土師器の併行関係に疑問を唱える声がある。(注7)しかし、併行関係をずらすことは別のところで矛盾を生むこととなる。むしろ、今回の曾池遺跡の例のようにS字甕C類(に近い形態のもの)が筆者の4期にまで共伴し得ると考えることによって、初期須恵器と無理なく共伴できると考えるが、そうした疑問の解決の為に、S字状口縁台付甕の再検討が必要であろう。

現状を、筆者の編年に対応させて示せば以下の通りである。なお、S字甕に地域的な差異を認める立場からすると、名古屋台地のS字甕をC類、D類という尾張低地部の分類に対応させることは妥当とはいえないが便宜的に、形態の一番近い分類で呼んでおく。

- 1期 …… C類 若葉通遺跡SB02(注8)
- 2期 …… C類、D類 清水寺遺跡SB4(1996年調査、年度内概報刊行予定)
- 3期 …… D類 高蔵遺跡夜寒地区SH01(注9)、高蔵遺跡I群土器(注10)
- 4期 …… C類、宇田型 伊勢山中学校遺跡SB16(注11)、曾池遺跡住居1

5期……………C類またはD類(?)、宇田型 伊勢山中学校遺跡SK108、109

先にも述べたように、3期と4期の間が整合していないが、例えば5期の伊勢山中学校遺跡SK109出土のものも、D類に特徴的な口縁部の肥厚はなく、むしろC類に近い特徴を示しており、3期から5期にかけてのS字甕の共伴状況は複雑である。こうした状況から見て、住居1出土の甕Aは、それを含む一括資料が4期に比定されることを妨げない。住居1出土の土器群を4期のものとできる。

住居1出土の土器群を4期と確定したところで、各器種毎に幾らかの特徴を整理しておこう。

壺は、甕と判別することが困難であることはすでに述べたが、それは住居1の壺が何れも単純口縁であることに起因する。4期の他遺跡の資料、たとえば伊勢山中学校遺跡SB16では、壺の主流は有段口縁のものである。但し、曾池遺跡の場合、調査されたのが炉跡を含む住居中心部であったため、比較的大型の壺類が出土しなかった可能性があり、有段口縁壺が無いことを積極的に評価できない。(注12)

甕Bは、口縁の形態だけに着目しても多様で、特定の形態を意図して作られたものとは思われない。甕Aが地域差を持ちながらも、なお全体として共通性をしめすことからすると対照的であり、まさにその多様さこそが重要な特徴であると考えられる。

甕Cについては、同様な法量のものが高蔵遺跡夜寒地区SH01で知られている。しかし、その他の出土例はあまり多くなく、どの程度普遍的なもので、こういった用途であったかなど不明である。

高杯Aについても、形態やつくり方、調整の方法などが多様であることが特徴である。この多様性は、単に曾池遺跡のみに止まらず、4期の資料全体に言えることである。伊勢山中学校遺跡SB16でも、同様に多様な高杯Aが認められる。また、高杯の杯部と胴部の接合部分について、アとイに分類したが、この両者は他遺跡の資料でも見られる。この両者は、3期の高蔵遺跡春日荘1号住居、2期の屈折脚高杯の初現期の資料である西北出遺跡の資料(注13)の中にも認められる。また、この接合部の特徴と、他の特徴(脚柱部の調整など)との間に相関関係を見出せておらず、時間差とも製作者の違いとも言い難い。

一括資料の評価としては、器種の構成や組成にも注意を払う必要がある。構成としては他の4期の資料と比較して欠落するものはない。組成では、甕と壺の分類に問題があるが、識別できた個体数としては壺3、甕9、高杯4、小型壺、直口壺、鉢各1となる。4期に属する資料では、高杯と甕が同数かむしろ高杯の数量が多いことが一般的であることから考えると、甕に対する高杯の割合が低い。また、小型壺、直口壺の個体数が少ないことも注意されるが、これはおそらく調査範囲が炉を中心とした住居の中央部に限られていることに起因すると思われる。

包含層出土遺物(図12)

包含層から出土した遺物の内、実測可能なものは3点あった。何れも須恵器である。36は、杯蓋。口径11.5cmをはかり、天井部と口縁部の境には突出する稜を持つ。口縁の端部は丸いが、外側にヘラでナデたような

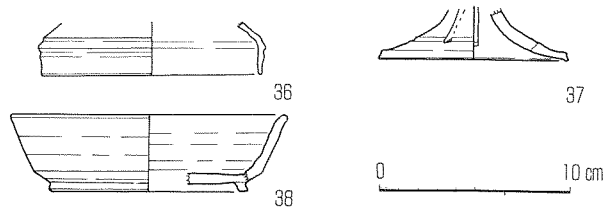


図12 包含層出土遺物

面を持っている。東山44号窯期から50号窯期のものであろう。37は高杯の脚部である。脚の端部は、外側に凹面を持ち、下方に突出する。おそらく三方と思われる透孔を持つ。透孔の下端付近に一条の沈線が巡っている。これも東山44号窯期から50号窯期に比定できるだろう。38は、高台をもつ杯身である。口径14.2cm、器高5.0cm、脚径10.2cmをはかる。岩崎41号窯期前後のものであろう。(注14)

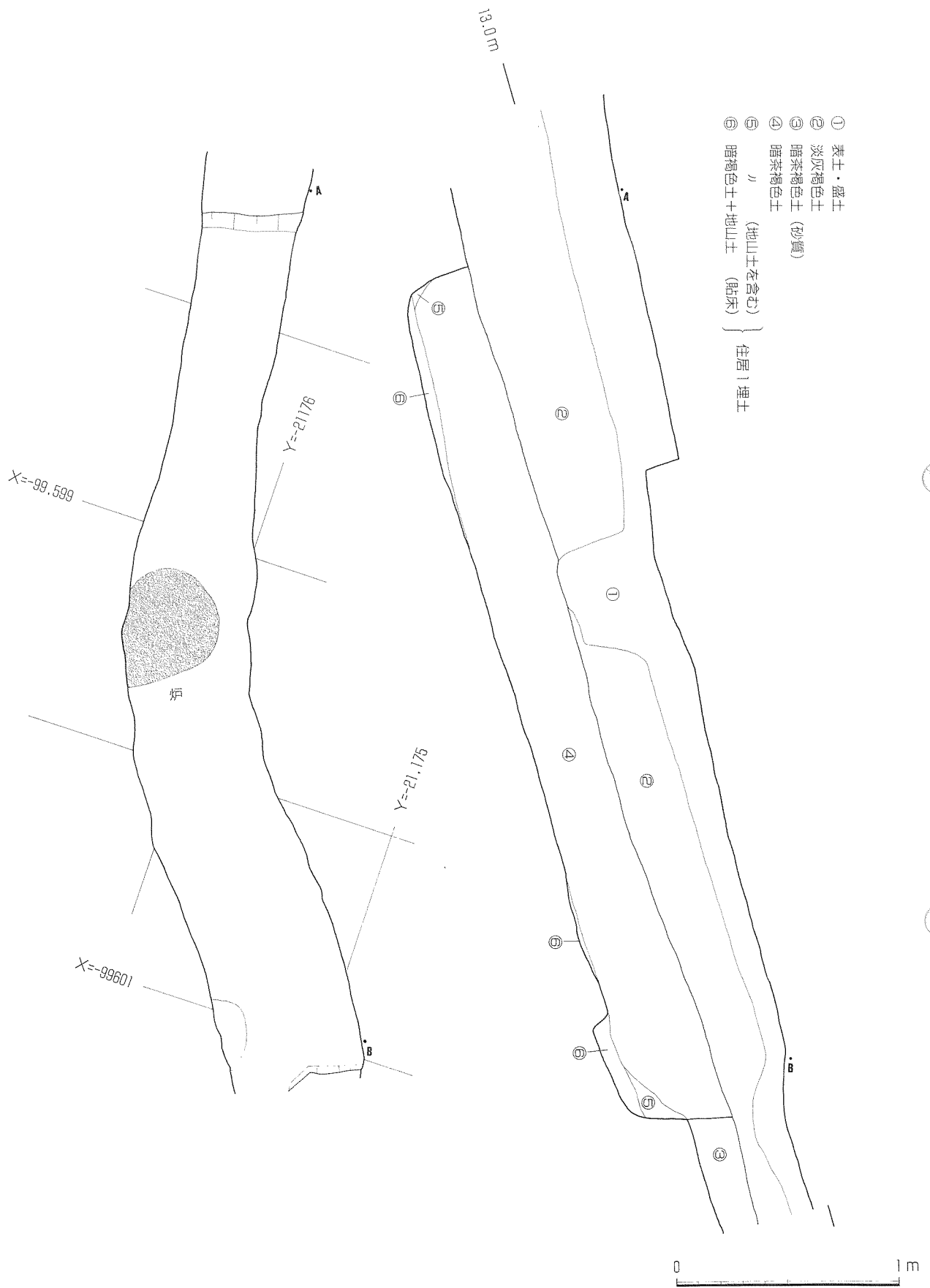


图13 住居1平面図・断面図

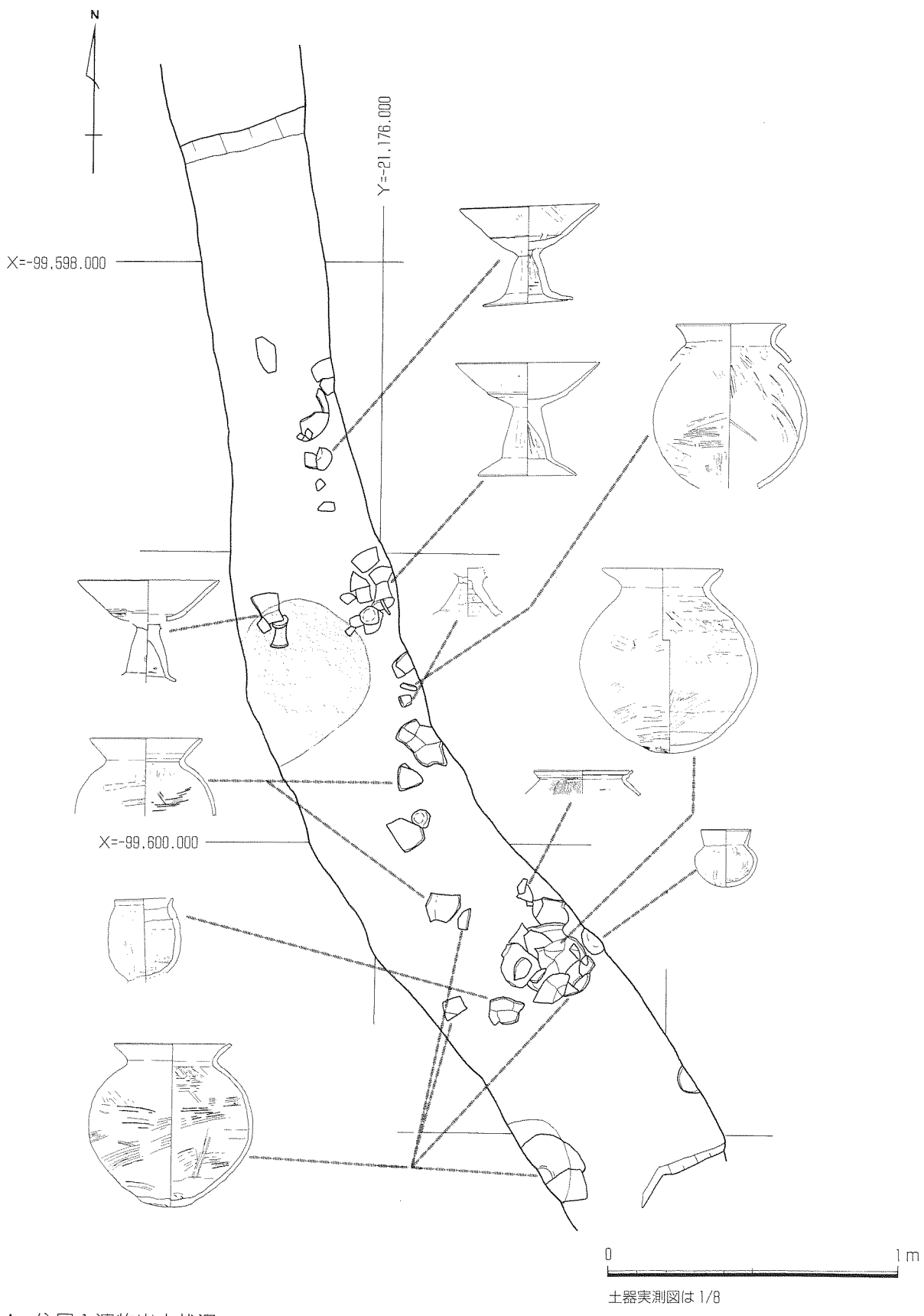


図14 住居1 遺物出土状況

遺物番号	時期・器種	形 式	出土位置	法 量 cm	外 面	内 面
1	縄文土器 深鉢		住居1 埋土		横の貝殻条痕	ナデか
2	土師器 器台		住居1 埋土		縦ヘラナデ	脚部ユビオサエ
3	土師器 高杯		住居1 埋土		突带上ヨコナデ	ヘラナデか
4	土師器 高杯脚		住居1 埋土		柱状部下半縦ヘラナデ	シボリ→横ヘラナデ
5	土師器 高杯脚		住居1 埋土		ヘラナデ	シボリ→横にナデ
6	土師器 高杯脚		住居1 埋土		縦ヘラナデ	縦ナデ→横ケズリ
7	土師器 壺		住居1 床面	口径16.4 器高25.4	上半ナデ、下半イタナデ 底部ヘラケズリにより丸底	上位ユビオサエからイタナデ 下半斜、横イタナデ
8	土師器 壺		住居1 床面	口径15.3	ナデ後部分的にイタナデ	頸部直下ナデ その下位イタナデ
9	土師器 壺	壺底部A	住居1 床面	底径3.5	ヘラナデによる平滑面	ナデ
10	土師器 壺	壺底部B	住居1 床面	底径5.0	縦ヘラナデ 底部ナデ	横ヘラナデ
11	土師器 壺	壺底部B	住居1 床面	底径5.0	ヘラナデ	ナデ
12	土師器 甕	甕A	住居1 床面	口径13.7	ハケメ	ナデ
13	土師器 甕	甕A	住居1 床面	口径13.7	ハケメ	ナデか 横位の擦痕あり
14	土師器 甕	甕B	住居1 床面	口径13.7 器高22.5	横ハケメまたはイタナデ 下半被熱	上位横イタナデ 下位縦横イタナデ
15	土師器 甕	甕B	住居1 床面	口径15.0	体部上位はイタナデ後ナデ 下位はハケメ	縦、斜イタナデ(幅1cm) 擦痕顕著
16	土師器 甕	甕B	住居1 床面	口径16.0?	ヨコナデ	ヨコナデ
17	土師器 甕	甕B	住居1 床面	口径13.0?	ヨコナデか	ヨコナデか 端部内側指頭ナデ
18	土師器 甕	甕B	住居1 床面		ヨコナデ	ヨコナデ
19	土師器 甕	甕B	住居1 床面		ヨコナデ	ヨコナデ
20	土師器 小型甕	甕C	住居1 床面	口径8.0	縦イタナデ	指頭によるナデ 粘土継ぎ目残る 体部ヘラナデ
21	土師器 甕台部		住居1 床面	台径11.4 台高5.1	縦ハケメ	体部ナデ
22	土師器 甕台部		住居1 床面	台径7.9 台高3.0	ナデ 接合部イタナデ	体部イタナデ 台部ヘラ押圧→ナデ
23	土師器 甕台部		住居1 床面	台径10.0?	粗い斜ハケメ	縦ナデ→横イタナデか
24	土師器 甕台部		住居1 床面	台径9.0	ナデ又はイタナデ	イタナデ
25	土師器 甕台部		住居1 床面		横、斜イタナデ	指頭ナデ 体部側その後イタナデ
26	土師器 甕台部		住居1 床面		横、斜ハケメ	体部イタナデ 台部縦ナデ
27	土師器 甕台部		住居1 床面		ナデか	体部イタナデ 台部横にナデ→縦ナデ
28	土師器 直口壺か		住居1 床面	口径8.0	縦イタナデ	横イタナデ
29	土師器 小型壺		住居1 床面	口径8.9	体部ナデか	斜イタナデ
30	土師器 小型壺		住居1 床面	口径6.8 器高7.9	体部上位ナデ 体部中下位イタナデ	イタナデ
31	土師器 鉢か		住居1 床面	口径16.0	口縁ヨコナデ 体部ナデ	口縁指頭圧痕 体部ケズリ
32	土師器 高杯	高杯A	住居1 床面	口径20.0 器高15.5	杯縦イタナデ→ヨコナデ 脚縦ヘラナデ	杯ヨコナデ 脚柱部縦ナデ
33	土師器 高杯	高杯A	住居1 床面	口径19.4 器高13.3	杯、裾部ヨコナデ 脚柱部縦ヘラナデ	杯内底面ヘラナデ 脚柱部シボリ→横ケズリ
34	土師器 高杯	高杯A	住居1 床面	口径19.4	杯底と体部の間イタナデ 磨滅により不明	杯磨滅により不明 脚シボリ→横ケズリ
35	土師器 高杯脚		住居1 床面		縦ヘラナデ	横にナデ、ユビオサエ

表1 住居1出土土器観察表

色調	胎土	焼成	遺存	備考	遺物番号
外 鈍い赤褐色 内 同上	粗い	良好	小片	口縁端ナデ面とり 外面低い突帯	1
内外 橙色	やや粗い	良好	図化部全存	心棒使用か	2
内外 鈍い赤褐色	やや粗い	良好	1/6		3
外 赤褐色 内 橙色	粗い	良好	図化部全存	接合イ	4
外 明赤褐色 内 橙色	普通	良好	図化部全存	接合イ	5
内外 鈍い橙色	やや粗い 微小雲母片	良好	図化部全存		6
内外 明黄褐色	普通	良好	1/2	内面粘土継ぎ目残る 底部外面中央凹む	7
外 鈍い黄橙色 内 橙色	普通 雲母小片	良好	1/2		8
内外 褐色	普通 雲母小片	良好	2/3	底部外面中央凹む	9
内外 鈍い橙色	やや良	良好	1/3		10
内外 黒色	普通	良好	1/6		11
外 黒褐色 内 橙色	やや粗い 雲母小片	良好	1/8		12
内外 鈍い橙色	普通 雲母?	良好	1/6		13
外 鈍い黄橙色 内 橙色	やや粗い	良好	2/3	下半被熱により褐色 突出する平底	14
外 浅黄褐色 内 明褐色	普通	良好	1/2~1/3		15
内外 灰褐色	やや粗い 雲母小片	良好	1/8	口縁内傾面 スス付着	16
内外 鈍い赤褐色	やや粗い	良好	1/8	外面スス付着	17
外 灰褐色 内 鈍い褐色	やや粗い	良好	小片	外面スス付着 端部附近強いヨコナデ	18
内外 鈍い黄褐色	やや粗い	良好	小片	内面炭化物付着	19
内外 橙色	粗い	良好	1/2	台部が剥離	20
内外 橙色	普通	良好	図化部全存	台端部内側へ突出	21
内外 赤褐色	普通	良好	図化部全存		22
外 明褐色 内 明赤褐色	やや粗い	良好	1/4	端部内湾	23
内外 鈍い黄褐色	普通	良好	1/4	端部内傾面	24
外 鈍い黄褐色 内 橙色	やや粗い	良好	図化部全存		25
外 明赤褐色 内 黒褐色	普通	良好	図化部全存	甕Aの台か	26
内外 明赤褐色	粗い	良好	図化部全存		27
外 橙色 内 明赤褐色	普通	良好	1/6		28
内外 赤褐色	やや粗い	良好	1/3	胴部の傾き不正確	29
内外 鈍い橙色	やや密	良好	1/3	被熱により黒褐色	30
内外 赤褐色	やや粗い	良好	1/8		31
内外 橙色	やや密	良好	2/3	脚径13.6、杯深5.0 脚高15.5、接合ア	32
内外 橙色	やや粗い 雲母小片	良好	1/2	接合イ、杯深4.9 脚高6.6	33
内外 橙色	粗い	良好	杯1/6	脚部は全存 脚に透孔1	34
内外 橙色	やや粗い	良好	図化部全存	杯脚接合部に粘土付加	35

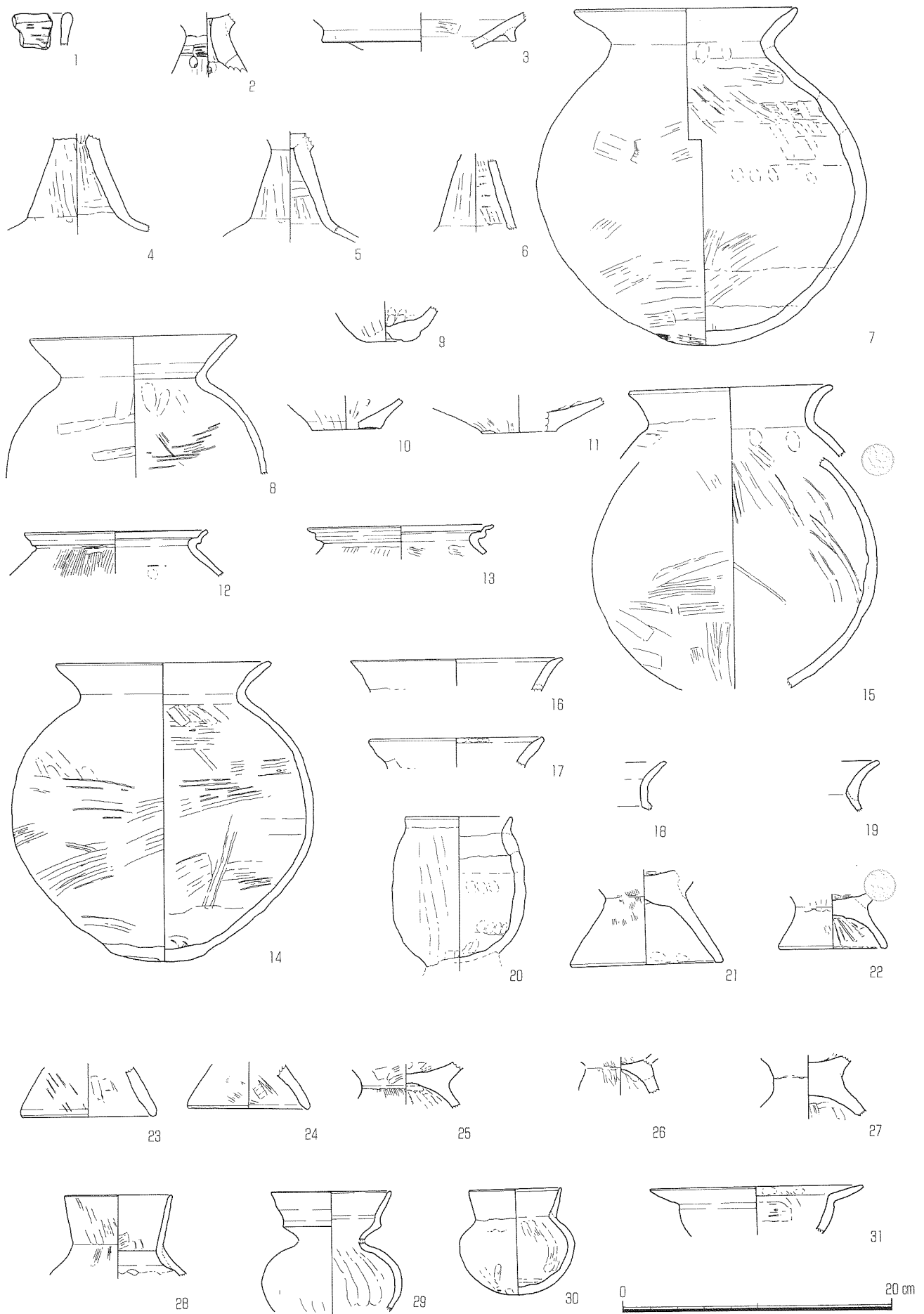


图15 住居1遺物出土(1)

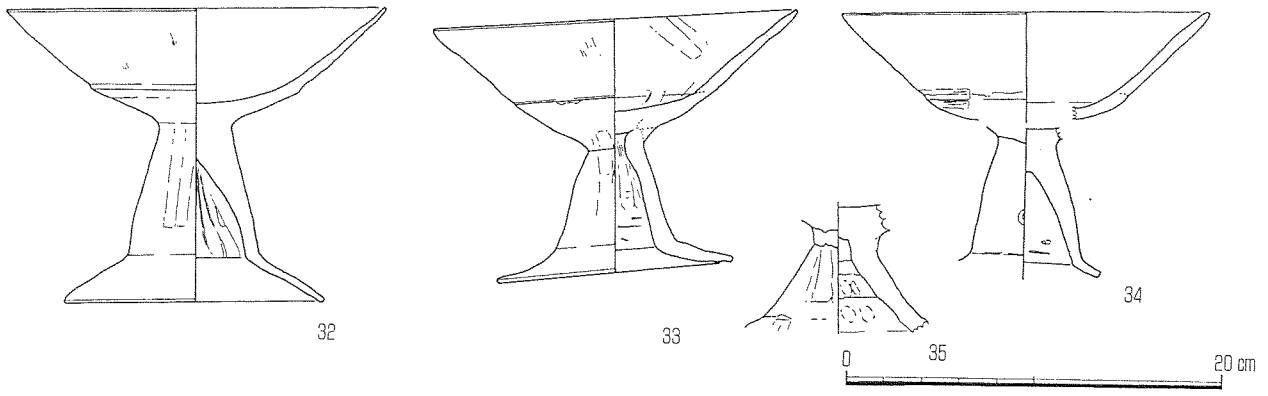


图16 住居1 遺物出土(2)

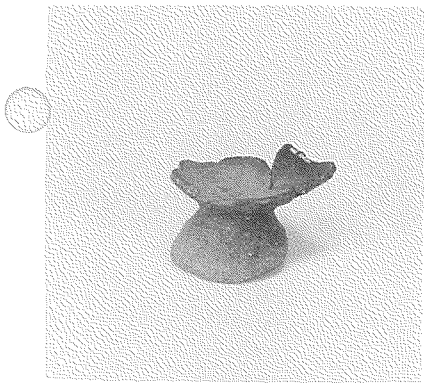


写真10
土坑2 出土遺物

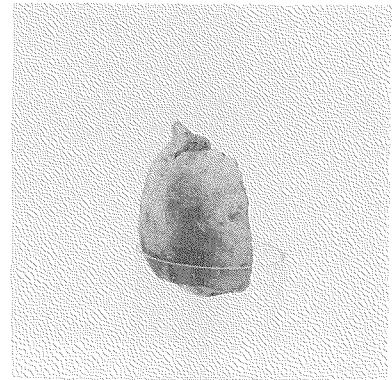


写真11
住居1 20

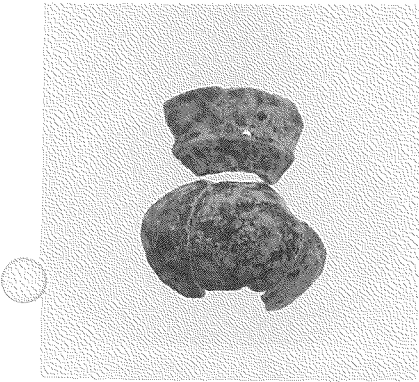


写真12
住居1 29

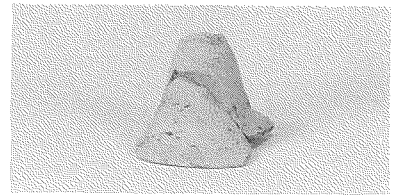
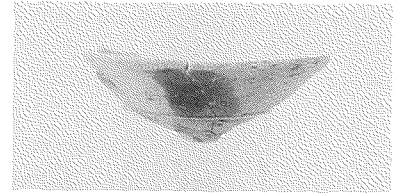


写真13
住居1 33

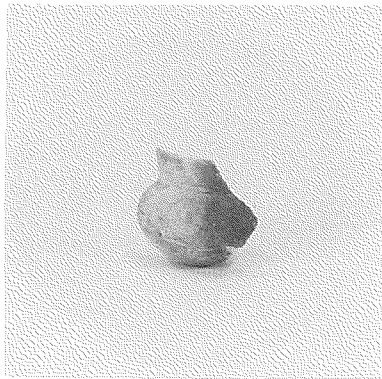


写真14 住居1 30



写真15 住居1 32



写真16
住居1 7



写真17
住居1 7底部

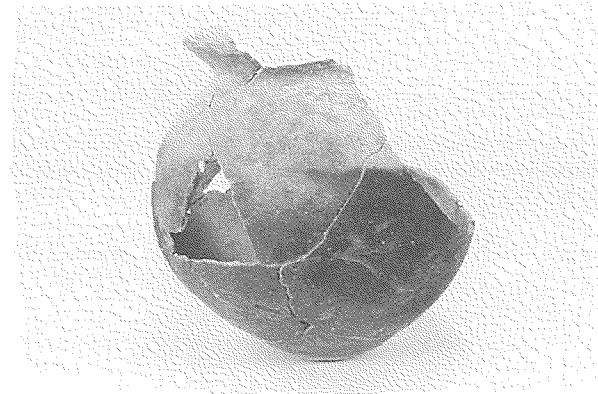


写真18
住居1 14

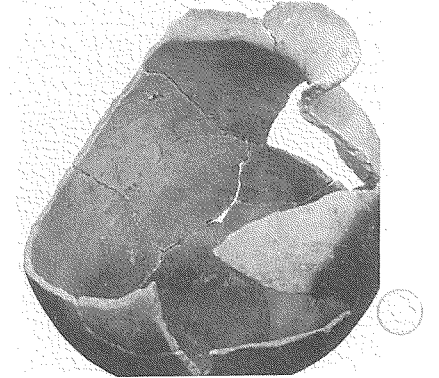


写真19 住居1 14内面



写真20
住居1 14底部

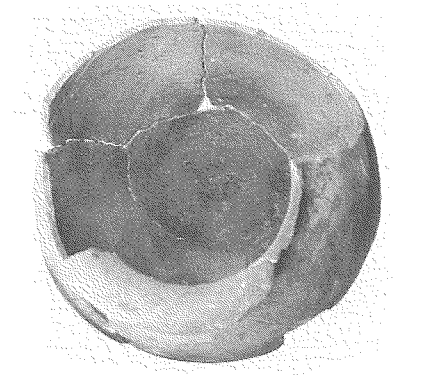


写真21 住居1 14底部内面

5 まとめ

今回の調査では、防火水槽地点で中世の掘立柱建物を1棟、放水銃の給水管地点で古墳時代の竪穴住居1基を検出した。

防火水槽地点の掘立柱建物の時期はおおよそ14～15世紀と考えている。曾池遺跡における中世の遺構としては、先述したように、今回の調査地点の北側で中世の井戸が発見されている。この井戸の時期は、今回検出した掘立柱建物からみるといくぶん先行し、位置の点でもやや離れている点で、今回の建物と直接の関わりは考えにくい。しかし、前述した、曾池遺跡から呼続遺跡にかけて中世の遺構が広がっていたであろうという想定に、微弱ではあるがより具体的な根拠を提供したということではできただろう。ただ、広がりには未だ想定の域をでていないし、同時存在した遺構を抽出することもできない。今後の資料の増加を待ちたい。

一方、給水管地点の竪穴住居については、良好な土器資料を得ることができた。曾池遺跡に北接する呼続遺跡では、古墳時代の、注に示した編年の5期以降の竪穴住居が8基検出されている。時期は曾池遺跡の竪穴住居にやや後出するが、ほぼ連続している。これらの住居の多くが一辺4m前後と今回検出された住居とほぼ同様な規模のものである。また、今回の住居1と同様に貼床状の盛土がなされているものもある。

曾池遺跡の中でも、今回竪穴住居が検出された地点の北西では、三渡氏の調査で、6世紀代の竪穴住居が見ついている。こうした点から見て、須恵器の出現前から定型化した須恵器が出現する時期にかけて、現在の呼続小学校から富部神社に及ぶ、比較的大きな集落が営まれていたと推測することができるだろう。

その住居1床面から出土した遺物については、やや詳しく述べたが、名古屋台地南部の古墳時代中期の土器の様相を把握するのに貴重な資料となる。須恵器を伴っている呼続遺跡の住居跡出土資料と合せて、須恵器出現前後の土器様式の変化を跡付けることも可能となった。呼続遺跡では、定型化した須恵器出現以降の住居においても、焼土面が見られるのみで、カマドは見つかっていない。カマドが比較的早く導入されると思われる遺跡との土器の比較、すなわちカマドの導入と土器様式の変化の直接の関係の把握、も今後の課題と言えるだろう。

また、同じ笠寺台地上に立地する見晴台遺跡や更に南の鳴海丘陵の三王山遺跡、清水寺遺跡などでも古墳時代前期後半から中期の竪穴住居が検出されており、遺物も良好な資料が出土している。現在の名古屋市域南部という地域的に限られた中で、土器の変化や遺跡の動向など更に検討していかねばならない。

注

(注1) 赤塚次郎「考察」『廻間遺跡』 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第10集 1990

(注2) 森泰通他『神明遺跡』 豊田市教育委員会 1996

(注3) 赤塚次郎「松河戸様式の設定」『松河戸遺跡』

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第48集 1994

(注4) 筆者が前稿で示したものの一部に、最近の成果を加え、赤塚氏、加納氏及び畿内の編年との対照を加えたものを示しておく。なお、前稿で不十分な点があったので幾らか触れておく。

本報告に関わる4期を巡る問題としては、4期と5期の区分の問題がある。すなわち、筆者が伊勢山中学校遺跡の報文中で、4期から5期の資料について、I、SB16、27→II、SK14、120→III、SK108、109という順序を示し、Iについては4期に、IIIについては5期においたが、IIの帰属については触れなかった。問題なのは、IIの中に含まれる杯部が内湾し、一見椀状に見える高杯の存在である。(図17)これを以て椀状杯部の高杯と見れば、5期となるが、別のものとみれば4期とすべきものである。椀状杯部の高杯は、杯部の先端をわずかに外反させること、脚柱部と裾部の一連の調整、脚裾端部を肥厚させ、外面にやや幅の広い面をなしている点などを共通する特徴としてっており、伊勢、美濃、尾張などで比較的斉一的な姿を示している。問題の杯部が内湾する高杯は、こうした特徴を持っておらず、椀状杯部の高杯とは別のものと考えたほうがよいと思われる。であるから、問題のIIの土器群は4期に含めて考えたい。そして、今回の曾池遺跡の一括資料を始めとするこれまでの4期の資料(上述のI)には、杯部が明瞭に内湾する

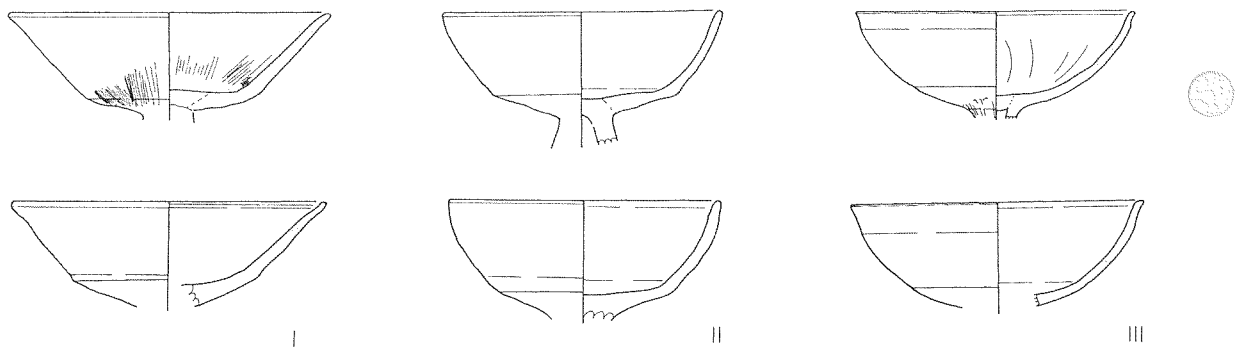


図17 I～IIIの高杯

資料は含まれておらず、時間的に前後の関係にあるのではないかとと思われる。IIの資料にはいわゆる初期須恵器が共伴していることもそれを裏付ける。すなわち、4期を二分することが可能ではないかと考えているが、一方で問題も残る。伊勢山中学校遺跡SB27埋土中からは、定型化した須恵器が出土している。土師器の特徴は、一般的に須恵器を伴わない土器のものであることと、同遺跡の住居の切り合いの多さと埋土識別の困難さから、この須恵器を混入と判断したが、その結果が上述の順序にも反映されている。しかし、後述するS字甕の問題の様に、遺構埋土から共に出土した遺物が同時のものか混入かは類例の増加によって検証されていく問題であり、今後その評価が変化することもありえる。また、本文中でも述べたが、4期の高杯は形態の多様さを特徴としており、様々な形態のものが共伴しているのが現実である。高杯の変遷をあまり図式的に考えないほうが良いのかもしれない。

村木誠「土師器・須恵器—伊勢山中学校遺跡5次調査出土土器の検討—」

「名古屋市域の土師器について」

『埋蔵文化財発掘調査報告書24 伊勢山中学校遺跡(第5次)』 1996

なお、個々の基準資料の引用文献は、前稿を参照して頂きたい。

<赤塚編年>

赤塚次郎「松河戸様式の設定」『松河戸遺跡』

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第48集 1994

及び注1文献

<加納編年>

加納俊介「土師器の編年 東海」『古墳時代の研究』6 1991

<寺沢編年>

寺沢薫「畿内古式土師器の編年と二・三の問題」『矢部遺跡』

奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第49冊 1986

		名古屋市	尾 張	赤塚編年	加納編年	畿 内	畿 内 寺澤編年
1	屈折脚高杯以前 小型精製器種	若葉通SB02	岩倉城SX01	廻間Ⅲ式 3・4段階	塔の越期 新相	平城京下層 SD6030下層	布留1式
2	屈折脚高杯 小型精製器種残	月縄手SX01 同SX02下層 清水寺4住	西北出溝B 朝日SZ01上	松河戸Ⅰ式 1・2段階	西北出期	藤原宮SD912	布留2式
3	小型精製器種減 小型壺出現 S字甕D類	高蔵SH01 高蔵 春日荘1住	松河戸SK201	松河戸Ⅰ式 3・4段階	松河戸期 古相		
4	小型壺盛行 高杯多様化 宇田型甕出現	伊勢山SB16 見晴台OJ04号	福田SB04	松河戸Ⅱ式 1・2段階	松河戸期 新相	山田道 SD2570	
5	椀状杯高杯 小型壺消滅 初期須恵器	伊勢山SK108 SK109 呼統2号住	同者包含層	仮称宇田式 古相	宇田期 古相	平城京SD881	布留4式 <新相>
	杯、椀出現 定型化した 須恵器	大喜1号住 東古渡SD04	勝川NR01E		宇田期 新相	茨田安田 落込み	布留直後

表2 編年対照表

(注5) 土田関連遺跡発掘調査団『土田関連遺跡発掘調査報告書』 1989

(注6) 高木洋他『堀田・城之内』 岐阜市遺跡調査会 1996

堀田・城之内遺跡の例は、ここで検討している時期よりは古い、S字甕A類からC類までが同じ遺構埋土から出土することが問題となっているが、検討すべき課題は同じである。

(注7) 平松良雄「宇田型台付甕型土器に関する検討」『考古学論叢』

関西大学考古学研究室解説四拾周年記念 1993

注4の表に即して述べると、現状の理解ではS字甕C類は一般的に1、2期の資料に含まれる。それに対し、TK85型式は、おそらく4期併行と考えられ、S字甕の型式変化や共伴状況について現状の理解のまま、細分する方向では問題は解決しないだろう。

(注8) 名古屋市教育委員会『若葉通遺跡発掘調査の概要』 1989

(注9) 高蔵遺跡夜寒地区発掘調査会『高蔵遺跡発掘調査報告書』 1987

(注10) 高蔵遺跡調査会『高蔵貝塚－春日荘地区発掘調査報告書』 1982

(注11) 名古屋市教育委員会『埋蔵文化財発掘調査報告書24 伊勢山中学校遺跡(第5次)』 1996

(注12) 伊勢山中学校SB16では、住居のほぼ床面上から土器が出土しており、大型、中型の壺は、炉から比較的離れた地点で出土している。この住居の例を無批判に一般化するのは慎むべきだが、壺には被熱痕がないものが多いことも(本稿では逆に被熱痕のないものを壺としているが)考えれば、炉から離れた位置に大型、中型の壺が存在する可能性は否定できない。

(注13) 浅野清春・安達厚三「西北出遺跡出土の土師器」『いちのみや考古』18 1971

(注14) 斎藤孝正「古墳時代の猿投窯」『断夫山古墳とその時代』 1989

「東海西部」『須恵器集成図録』東日本編 I 1995



報告書抄録

ふりがな	そいけいせきはつくつちようさがいようほうこくしょ							
書名	曾池遺跡発掘調査概要報告書							
編著者名	竹内宇哲・村木誠							
編集機関	名古屋市見晴台考古資料館							
所在地	名古屋市南区見晴町47 TEL (052) 823-3200							
発行年月日	1996年12月27日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
そいけいせき 曾池遺跡	なごやしみなみくよびつぎ 名古屋市南区呼統四 丁目13番	23100	15-17	35° 06′ 10″	136° 56′ 05″	19951012) 19951031	100	防火水槽建設 の事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
曾池遺跡	集落跡	古墳時代 中世	竪穴住居 掘立柱建物	土師器 山茶碗、中世 陶器	住居床面一括土師器			



曾池遺跡発掘調査概要報告書

1996年12月27日発行

編集 名古屋市見晴台考古資料館
名古屋市南区見晴町47

発行 名古屋市教育委員会

印刷 株式会社名古屋大気堂